ちょうむすび　　ドイツ

昔むかし、あるところに、ひとりの仕立て屋がいました。冬のあいだはよく働きましたが、春になると、家の中で背中を丸めて、ひと針ひと針ぬっていくのが、がまんできなくなりました。そこで、荷物をかつぎ、ものさしとアイロンを両手に持って、旅に出ました。

まもなく、若い男に会いました。その男のこぶしときたら、金づちみたいでした。仕立て屋は、

「こいつは、鍛冶屋だな」と思って、

「こんにちは、鍛冶屋の兄さん。どこへお出かけかい」と、声をかけました。

「やあ、こんにちは、仕立て屋さん。なあに、鼻の向いたほうへ行くだけさ」

「どうだい、いっしょに旅をしないか」

「ああ、いいとも」

ふたりは、連れだって歩いていきました。

しばらくすると、またひとりの男に会いました。男の帽子と服に、真っ白い粉がついていました。仕立て屋は、

「こんにちは、粉屋の兄さん。どこへお出かけかい」と、声をかけました。

「やあ、こんにちは、仕立て屋さんに鍛冶屋さん。なあに、足の向いたほうへ行くだけさ」

「どうだい、いっしょに旅をしないか」

「ああ、いいとも」

三人は、連れだって歩いていきました。

夕方近くなって、十字路にやって来ました。鍛冶屋の鼻は右を向いていて、粉屋の足も右を向いていました。そこで、三人は、右の道を歩いて行きました。ところがそれは、まちがった道だったのです。やがて森のおく深く入りこんで、森から出られなくなりました。しまいに道がなくなってとほうに暮れていると、広い野原に出ました。そこには、緑にこけむした大きな岩が、地面に半分埋まって立っているだけでした。仕立て屋は、だまりこみました。そして、鍛冶屋は、

「悪魔でも出てくればいいんだ」とさけびました。粉屋も、

「今すぐ悪魔にお迎えに来てもらいたいもんだ」とさけびました。そのとたん、周りの木々がざわざわと鳴って、真っ黒な男が飛び出してきました。男は、赤い羽根かざりのついた緑色の帽子をかぶっていました。

男は、にわとりのように右足で地面をこすりながらいいました。

「さあ、お迎えに来ましたよ。おまえたちのうち、だれでもいいから、わしに問題を出してみな。わしが答えられなかったら、森から出してやろう。さもなければわしといっしょに地獄行きだ」

それから、悪魔は、まず、鍛冶屋に向かって、

「さあ、おまえの問題は？」とききました。鍛冶屋は、雷に驚いたねこのような顔をしました。悪魔は、

「早くしろ」とどなりました。鍛冶屋は、つっかえながらいいました。

「ここの大きな岩を雲の中に投げこんで、落ちてくるところを右の耳で受けとめることができるかい」

悪魔は、だまって、岩をつかんで土の中から引きぬきました。そして、それを、「それっ」と、雲に向かって飛ばしました。岩は高く高く飛んで行って、見えなくなりました。つぎの瞬間、岩がざあっと音を立てて落ちてきました。三人はあわててわきへ飛びのきました。悪魔は、その岩を右の耳で受けとめ、しずかに元の場所にもどしました。

「さあ、どうだね」

悪魔はそういって、鍛冶屋を足でちょいとけりました。鍛冶屋は、まっすぐ地獄へ飛んで行ってしまいました。

悪魔は、今度は粉屋に、

「さあ、おまえの問題は？」とききました。粉屋は、すっかりしょげかえっていいました。

「あの岩をひいて粉にできるかい」

悪魔はにたにた笑いました。そして、歯で岩をかみくだき始めました。がりがりっ、がりがりっ。火花がぱちぱちと散って、まもなく岩は、灰色の粉の山になりました。悪魔は、粉屋をちょいとけりました。粉屋は、まっすぐ地獄へ飛んで行ってしまいました。

悪魔は、仕立て屋に向かっていいました。

「どうだい、とうへんぼく。おまえの問題は？」

仕立て屋は、ぶるぶる震えて、顔はハンカチみたいに真っ白になりました。悪魔は、真っ赤な目でじっとにらみつけて、

「早くいえ。おれはいそがしいんだ」とどなりつけました。仕立て屋は、破れかぶれでいいました。

「あの粉になった岩をちょうむすびにしてくれ」

悪魔は、どうしようもありませんでした。いかりくるって地団太をふみました。すると、大地が口を開け、悪魔はまっさかさまに地獄へ落ちました。

仕立て屋が気がつくと、あたりにはだれもいませんでした。でも、岩の粉が山のように積まれていたので、夢ではなかったことが分かりました。そして、森からぬけ出すことができて、ぶじ家に帰りました。

仕立て屋は、かわいい娘と結婚しました。わたしのおじいさんは、結婚式に招かれました。しかも、わたしはこの話を、仕立て屋から何度も聞きました。だから、きっと、ほんとうのお話なんだと思いますよ。

村上郁再話

資料『世界の民話1ドイツ・スイス』小澤俊夫編訳／ぎょうせい